

一九五五年七月

夏期聖書講習会記録

水戸無教会グループ

まえがき

この小記録は次の目的によって作成されました。

第一、講習会出席を心より願いつゝも講習会前日、急逝された栃木県信愛園森田隆夫兄の霊に献げるためであります。

第二、病気その他種々の都合により参加できなかった人々に黒崎幸吉先生御講義の内容をお伝えし一人でも多くガラテヤ書の精神を学んで頂きたいからであります。

第三、誠に短期間ではありましたが、あの主に在る交りの喜びを新たにし、諸兄弟の御講義の復習の一助にさせて頂けたらと願ったからであります。

即ち、この小冊子は第一、第二、第三の目的を通じ神の栄光を讃美しその限りなき恩恵に心より感謝するためのものでもあります。勿論、打合不十分と速記技術の皆無及び紙数の製限は文が断片的であり十分に講習会の内容を再現しておりません。然し講義ノート、先生の御著書、等を用いまして正しい内容への努力は致したつもりであります。

どうか諸兄弟のご援助によりましてこの小冊子の目的の万分の一が達せられ、さゝさやかながら主の御用に立ち得ますよう祈っております。尚この小冊子のためその後も種々御教示下さいました黒崎先生に厚く御礼を申し上げます。

昭和三十年八月

水戸無教会グループ

記録 半田梅雄

松本 俣子

大森 孝夫

斎藤 文雄

編集 大森 孝夫

夏期聖書講習会順序（目次）

第一日

開会

自己紹介

第一講、ガラテヤ書一章一節―一五節

懇談会（一つの教会、信仰のみ）

第二日

早天祈祷会

第二講、ガラテヤ書一章一六節―二章二二節

第三講、ガラテヤ書三章一節―四章三二節

質問会（平和論とキリスト者 その他）

第三日

早天祈祷会

第四講、ガラテヤ書五章一節―六章一八節

閉会

夏期聖書講習会記録

於茨城県立西山研修所

自昭和三十年七月九日午後一時

至昭和三十年七月十一日正后

講師 黒崎幸吉先生

参加者四二名

主催 水戸無教会グループ

第一日 七月九日(土曜日)

午後二時一同着席、主催者代表 松本文助氏挨拶

続いて講習生の自己紹介一時間、時間不足につき残余の者は後刻紹介することとなる。

◎黒崎先生 第一講

午後三時一〇分―四時一〇分

(司会 小貫武寿)

讚美歌五四、詩篇一、讚美歌二八〇

○ガラテヤ書は使途パウロの筆になる。

○パウロはキリストの直弟子ではないが或意味では直弟子たるペテロ、ヨハネよりも勝れた働きをなした人である。(使徒行伝をみよ)

○新約聖書は四福音書、使徒行伝(以上正史) 黙示録(予言)を除くと他はみな書簡である。そのうちヤコブ、ペテロ前後、ヨハネ第一、第二、第三、ユダ書をまとめて、学者は一般書簡と呼ぶ(ヘブル書も一般書簡に入れてよい。) 他の書簡(十三卷)はみなパウロの書簡であり、エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモン書はパウロがローマの獄中に於てかいたもので獄中書簡という。テモテ前後、テトス書は教会を牧するについての諸注意を述べたもので牧会書簡という。この牧会書簡とピレモン書はパウロの友人、弟子たるテモテ、テトス、ピレモンに送った手紙である。他の書簡はロマ、コリントなど七つの場所の教会に宛てたものである。

○ガラテヤ書はロマ、コリント前後書と共にパウロの四大書簡の一つでガラテヤの教会に宛てたものである。ガラテヤ地方については二説がある。

(イ) (紀元前二八〇年頃) ゴール人が戦乱に乗じてゴール地方(フランス東南部)から移住し小アジアの中央高原の北部に集り土着するに至った地方―北部ガラテヤ説

(ロ) (起元前三五年頃) ローマの一州として定められた。本米のガラテヤを含む広いガラテヤ地方―南部ガラテヤ説

今なお此の二説が相対立しているが私としては後者の南部ガラテヤ説をとる。

○ガラテヤ書のかくれた目的をごく簡単にいうとユダヤ人以外のクリスチャンが救われる為には割礼を受けねばならないかという点を明らかにする為である。

○割礼はユダヤ人が旧約聖書にある如く自分たちが神の選民であることを強く意識、自覚せんがために、またその選民たることを他の民族と区別し証拠立てんがために行つたものである。ユダヤ人の選民意識は非常に強く、このほか他民族との結婚を禁じたり、難かしい食物の禁忌が多く定められてあつた。(レビ記十一章をみよ) また安息日にはきちんと休むと共に種々の規定を設けたり、異邦人と同席、会食することもきらつた。その極端なることは彼のペテロさえ屈服せしめられた程である。(ガラテヤ二・

一一)

○異邦人にしてユダヤ教に改宗したもの、即ち改宗者 *proselyte* (原義はユダヤ人の方にやって来る人) には二種あつた。

イ *proselytes of the gate* (門の政宗者) はあつさりした改宗者であつてユダヤ人の信仰を尊敬し、ユダヤ人と接近したる程度のものであつて割礼をうけていない。

ロ *proselytes of righteousness* (義の改宗者) は強い改宗者であつて割礼を受けたる人である。ユダヤ人は前者は救われないが後者は割礼を受けているが故に救われると主張した。

○パウロは信仰の絶対性を身を以て体験したる人であつて割礼をうけずとも信仰のみによつて救われることを唱えた。

○伝統、習慣の力は非常に強大である。パウロのこの教えはユダヤ人にとつて正に革命的であり、彼等の猛烈な反対、迫害を受くるに至つた。

そのため此の割礼問題についてパウロとバルナバはシリヤのアンテオケからエルサレムの教会にゆき、使途、長老たちと論争することになつた。此の会議の模様、結末の詳細は使徒行伝一五章をみれば判る通りですがパウロは使途の長であり自分もすでに異邦伝道の経験があつたためペテロの立場を十分に理解してくれた。

(使徒一五・七―一一) 然し忠実なユダヤ教の保持者であるヤコ

ブは気分の上からは少くとも此の自由を認めることを喜ばなかったが、パウロの条理ある主張には原則的に譲歩せざるを得なかった。そこで彼は一種の妥協案を提出した。即ち異邦人に対し割礼を強制し煩わすことはいけませんが偶像に供えられて、けがれたもの（コリント前八・一）と淫行（ギリシヤ人はコリント前書にもある通りこの点がルーズであった）および絞殺したる物と血（律法によれば血は生命の象徴）とは避ける必要があると述べた（使徒行伝一五・二〇）

○エルサレムの使徒会議によつて一応の妥協が成立し異邦人が割礼なくとも救にあづかり得ると言うパウロの主張が認められた。然しパウロへの妨害は止んだ訳ではない。相手は頑迷なるユダヤ人である。その執拗さは今日われわれ無教会に対し洗礼をなぜ受けないかと反対する人々の執拗さと同じである。其の後も彼の伝道地たるガラテヤに於てパウロによつて信仰に入った異邦人はユダヤ人のために猛烈な攻撃を受けるに至つたのである。

○パウロは割礼をさずけてはいけないとはいっていない。パウロは差支えなき限り努めてユダヤ人の習慣を重んじた。（使徒一六・一〜二）パウロが全霊をあげて反対したのは割礼をうけざれば救われないという主張に対してであつた。パウロの目的は人々

を神に導くためであつて儀式のためではない。彼がテモテに割礼を施したのはテモテが救われないからやつたのではなくて他のユダヤ人を信仰に入れるのに必要があつたからである。このパウロの自由な信仰と愛を見よ。

○キリストにより頼みキリストによつて救われる、即ちたゞ信仰によつてのみ救われるのを人々が長い間の伝統、習慣に吞まれ信仰のみの福音に何か物足りなさを感じ割礼をうけるならば、他人と同じように自分も又割礼を受けたから救われるのだという気持ちになつてしまい、キリストによつて救われるという信仰がなくなつてしまふであらう。パウロの恐れたのはこゝにあつたのである。誠に恐しき限りである。

○ガラテヤ書五章をみよ。人もし律法の行為が救に必要な条件と思つて割礼をうけるならば、人はキリストの十字架のみによつて救われないことになり、キリストは無用となつてしまふではないか。五章を熟読せよ、五章は割礼の無用を教える。まことにキリストを信ずることによつて救われたる者にとつては「割礼」も「洗礼」も無用であり、それらから全く自由である。

以下ガラテヤ書本文を説明する。

○一章一〜五節は書簡易頭の挨拶である。

一節。「人よりに非ず」の「より」apo は from と同意にして源泉を示す。パウロの使徒職は人間から生まれて来たのではない。「人に由るにも非ず」の「由る」dia は手段、媒介を示す。

人間的任命や按手によるものではないとの意。

実にパウロの使徒職は人間と全く関係なくダマスコの途上に於て復活のキリストを彼に現わしめ給いし父なる神の直接の御召しによるものである。このことは極めて重要な前提であり、これによつてガラテヤ書の全文の意を知ることができるであろう。

三節。クリスチャンの生活にとつて最もありがたく大切なものは神より賜う恩恵とそれによる平安である。三節はパウロの愛の溢れる熱き祈りである。

四節。神の愛を思うて我らの心は感謝に溢れる。

五節は神に対するパウロの頌榮、彼の心は常に神の栄光に対する讚美を以て充されておつた。

○六〇一〇節はガラテヤ人の背教を責む（偽使徒と偽福音）

八節の「詛はる」anathema は神の恩恵を離れて滅亡と審判の下にあること、非常に強い言葉である。

七〇九節よりわれわれはパウロの強い確信を知る。この強い確信はどこからきたのであろうか。それはパウロの信仰の中心はイ

エス・キリストであり、彼の信仰はイエス・キリストの十字架の贖いの信仰であつたからである。そして何よりもパウロにとつて大切なことはイエス・キリストのつながりにあつたのである。

これらを見無視した即ちキリストの恩恵の福音を空しきに帰すが如き教説あらばそれらは皆「詛わるべし」と唱えることは、全身全霊を以てキリストを信ぜしパウロにとつては当然の叫びであつた。パウロの憤りは党派心によるものではなくて、神による憤りであつたのである。

○救われるためには洗礼をうけなければならない。教会に入らなければならないと主張し十字架の福音を空しくする人々は、このガラテヤ人の過誤を再び繰り返すことになるであろう。

○一〇節、人間の喜ぶことは、自分が何か良いことをして救われたい、また、そういう行いをして自分に値打をつけ安心したり他人に誇り認めてもらいたいというようなことである。善行をなすとか、割礼や洗礼をうけるといふようなことは他人を喜ばせると共に自分自身にも安心を与える。パウロが人に喜ばれんと欲するならば割礼を高調したであらうし、また偽使徒どもに対しこれ程激しき非難を浴びせなかつたであらう。

○神は行為、形式を御前にもつてくることをきらわれる。神は碎けたる魂神にのみより頼む信仰を喜び給う。われわれはパウロと同じくキリストの僕として人に喜ばれるのでなく、神に喜ばれることを求める。

○日本人一般の神観は極めて低級にして幸福を与えるものとして神を幸福の取引対象と考える。

○ユダヤ人の神は創世記一章一節に示される如く天地万物創造の神である。そして神の創造の頂点、最高傑作は人間である。然しその人間は神にそむきエデンを放逐された。されど義と愛の神は罪ある人間が神の許に立ち帰る道としてキリストを遣わされた。

「神を見るものは死ぬべし」然しキリストによつて我らは死なないで神に立ち帰ることができるのである。

○神の最大の喜び、希望は罪ある人間が神に立ち帰り神と再び交わることである。割礼や洗礼を問題にしこの神の喜びを無視し神との生ける交りを忘れようとする人々のためにパウロが記した書簡こそ、実にこのガラテヤ書なのである。

懇談会、午後七時半より 約二時間

讚美歌三三六 コリント前一・一八〜三一

(司会 石原秀志)

前回時間不足のため残った人々の自己紹介の後黒崎先生より次のような御話を頂く。

○ここに参集した人々はチャーチ・オブ・クライストの伝道によつて信仰に入つた人、晴嵐荘に於て信仰に入つた人、また水戸無教会のメンバー、その他等種々の立場の人達が多い。

いろいろの伝道が入りまじっていることは人々が種々の方面より信仰に入ることができて良い事だと思ふ。そして私は種々の信仰立場、教派の人達がこのように一堂に会し得たことを大変嬉しく思ふ。

○私は各派の教会は帰一し「一つの教会」であるべきだと信ずる。たゞ此の際「一つ」であるべきだということは全部を一色に塗りつぶすということではない。例え教理・制度等に於て異なる立場にあつても確信や高慢を以て排斥すべきではなく真実にキリストを愛し神とキリストとの出会の事実にて凡ての中心をおいて一致すべきであると思ふ。またわれわれはこれからのガラテヤ書の研究によつて一致すべきところを考えるべきである。

○ガラテヤ書は奥義である。そしてガラテヤ書の中心は「義とせらるゝは信仰のみ」ということであるから正しい信仰がないと理解することは出来ない。明日からの講義は信仰の中心について話していくが判らないからといってすぐにながかりすることは無い。よくロマ書七章七節、コリント前書一章一八節、コリント後書五章一四節以下等を熟読しておいてほしい。そして私は諸君がルターや内村鑑三の信仰がこのガラテヤ書にあることを知つてほしいと思ふ。

第二日 七月十日(日曜日)

○起床・・・午前五時半

○早天祈祷会・・・午前六時～六時半

(司会 大森孝夫)

讃美歌二、ガラテヤ書六の一～一八、讃美歌五二九

◎黒崎先生 第二講・・・午前八時～一〇時

(司会 吉川 充)

讃美歌一五二、コリント後書五の一～二一、讃美歌三二八

○ガラテヤ書は教理を説明したるものでなく、より大切な信仰の本質をパウロが、戦闘的に激しく述べたるものである。信仰をもて信仰の本質を理解せずばこの書を理解することはできない。

○ロマ書七章は罪の問題である。「罪とは何か。」これを徹底的に理解、体験せざればキリスト教を理解することはできない。罪によって我々は人間に絶望し神を知る。

○普通、日本人は殺人、強盗、姦淫等個々の悪行のみを罪と考え、これらをなざざれば罪人に非ずと考えている。剩さえ「生長の家」は罪など存在せずとまで唱えている。キリスト教の罪は佛教のいう人の罪業とも全然異なる。クリスチャンの家庭に生まれたる者といえども罪の觀念は希薄である。例え、罪を知らずとも人間は誰でも自己が不完全であり、聖人に比べて劣っていることを知っている。我々はこの不完全を修養、努力によって補おうと

する。我々が罪を知らんとするには先ず我らの良心を神の前に持つていかねばならぬ。倫理道徳により人は己の不完全を知るのであるが、之では罪の意識までには至らない。

○人間の不完全さを知るだけでなく更にはつきり罪の意識を得るには我らはイエス・キリストを見なければならぬ。イエスは人を愛し、父なる神に絶対服従された。イエス・キリストは普通の人間と同じ体形をもつておられたが如何なる場合にも、父のなし給うことを見て行うよりかは自ら何事もなし得ない(ヨハネ五の一九)という徹頭徹尾神に服従された神の子である。人間にはなし得ないイエス・キリストの非常なる力は神に対する完全な服従、従順さから起つたものである。我々は自己の欲望に負け、神に近ずかんと欲するも近づくを得ず、従順たらんと欲するも従順たるを得ない。人間が肉の欲、サタンの誘惑に勝抜くためには神の力に頼らざれば絶対に不可能である。

○我々は山上の垂訓にある如く「心の清き者」とならんと欲するも、心は非難さるべきみにくい多くの欲望に充たされる。(内に起つたことも外に現われたものと同じである。) また「天の父の如くなれ」という命を實行しようとするも力及ばず絶対の困難に陥る。然しかかる熱心な気持と願いをもたざれば罪の意識は起さない。

○我々の罪の力は罪に反抗することによってわかる。サタンをしらず悪を平気でなすは強大なサタンの力に引張られているからで

ある。サタンを知るはサタンに抵抗する時である。良心を振り起してサタンに激しく抵抗すればする程、我らはサタンの力の強大さ、罪の深さを知る。

○道徳には理想の限界があり目標があるから次第に之に近づけるように思う。例えば意志により己を克服して礼を行えば仁に至るという。然しキリスト教は目標や意志の問題ではない。心全体の問題である。

○どんな偉大なる信仰者でも必ず、持ち、持たねばならぬものは罪の問題である。そして信仰の深い人であればあるほど、罪の深さをより一層知り体験した人なのである。ペテロ、パウロ、アウガスチン、ルーテル、カルビン、ウエスレー、バンヤン等はその例である。

○我らは自分の心を真剣に凝視し、虚偽はないか、心から人を愛し清くあるか、自己中心の点はないかと厳格なる自己批判をなすべきである。我々はこの厳格なる自己批判を徹底厳密にイエスと対照してみることによつて極めて強い罪の意識を得るであろう。

○徹底した自己批判を有せざる信仰、キリスト教は極めて危険である。キリストの十字架上の死によつて我らの罪は贖われたのであるから我らはどんなことをしてもよい。我らに罪なしという人あるは許さるべきでない。パウロの生涯は徹底したる自己批判の生涯であった。

○パリサイ人は偽善者（ヒポクリテス）であった。ヒポクリテスは役者の意であつて心から善くならず人からの批評によつて動き、人の前に心と一致しない、いつわりの善き行動を示すものである。イエスが彼等の不真実を非常に攻撃されたのは当然である。我らは他人が自分を如何に批判するかを気にせず神が自分を如何に見ておられるかを考えよ。

○ルーテルは刻苦精進し戒律を守つた。然し彼は外形を正しくし行い励めば励む程、己の心が汚れに満ち満ち如何にみにく、穢いかを知つた。「サタンは修道院の壁を喰ひ破つても入つてくる。」とは悲痛なる彼の良心の叫びであつた。然しパウロの苦悶はルーテル以上のものであつた。

○神は人間が如何に律法を守るとも喜び給わない。神は人間と話しさることを好み、求め給う。神は自ら義とする人を好み給わない。神は罪を悔い、打ち碎かれたる魂を最も好み義となし給う。

○パリサイ人は律法を守るために如何に偽善的であつたか多くの記録が残つている。私もベルリンのシナゴクでその一例を見た。かゝるパリサイ人の中にあつたパウロは熱心なパリサイ派としてクリスチャンがユダヤの誇りを汚し、神を冒瀆するものと考え激しく彼等を迫害し、遂にステパノを殺すに至つた。然し彼はステパノの平然たる最後を見て非常なショックを受けたに違いない。そしてかゝることが積もり積もつて彼はダマスコ途上に於て復活せるイエスに会い回心するに至つたのである。

○回心せるパウロの書たるロマ書の七章を説明する（七節以下を
読みながら略解さる。）我らキリスト者はキリストと共に死して
今まで自分を縛っていた律法から解放された。そして新に生れ聖
霊の導くまゝに行動し神に仕えるものである。七節以下は律法と
罪との関係を述べている。

○律法によつて始めて罪の認識が生ずる。人間は「貪る勿れ」と
の誠命が与えられない間は貪りが罪たることを知らない。逆にこ
の誠命が与えられ返つて慳貪が起る。そして律法を守ろう、守ろ
うと努力するもサタンが来つてこれを妨害する。これは律法が悪
いではなく罪が律法を利用して人を罪の奴隷とするのだ。律法
を厳守せんとして我らは自己の罪の大なるを益々強く感ずるに至
る。

○罪は律法を以て我らに働きかける。律法なくば罪は恰も死せる
ものである。だからパウロは律法を知らなかつた時代はのびのび
としていた。然し律法を知りし時、これまで死んでおつた罪は生
き返り反対に自分の靈魂は懊悩の極、死せるものとなつた。

○律法は元來善なるものであるが、無力にして罪に打勝つのが
ない。

○すべての人間は肉につける者にして罪に束縛されたる奴隷であ
る。従つて神の命をきけと言われると返つてサタンはこれを利用
して命から遠ざける。罪は我が肉に宿り我らを圧伏し神の律法に
従わせない。律法を行わんと欲しない間は罪はその力を示さず人

は罪を知らない。然し律法を行わんとするや己の力を振り起し我
らを圧伏し、我らがこれに反抗せんとする努力に比例して罪また
その力を増大する。かくして人間は遂に罪の力に圧伏さるるに至
るのである。

○我が為さんと欲することは実行すること出来ず返つて心より憎
んで為すまいと思う事を自然に行つてしまふ。肉なる我は何と憐
むべき存在であるか。アダムとエバの例を見る如く、これが人間
の本質である。

○人間にとつて最も大切なことは神と共に生きることである。神
を離れると良心によつて善悪を知るも悪を去り善を行う力を有し
ない。良心があればある程人間は悩む。人道主義など、人間の力
で人間が良くなるうと考えるのはアダムとエバの子孫たる者の特
色である。

○Mind (νοῦς) 理性、判断力 heart (καρδιά) 感情、soul (ψυ
χη)、生命、魂、生物としての心 spirit (πνεῦμα) 靈魂、神の心が
わかる心、神から来る心。

○パウロは律法によつて己を義たらんとした。然し律法を厳守す
ればする程、絶対の絶望に陥り遂には此の死の体より我を救わん
者は誰ぞやと悲痛なる叫びを発するに至つた。クリスチャンに
とつてかゝる絶対の絶望になれる、なれないは問題でない。必ず
なるべきである。我々は律法を完全に守っているかどうかと厳に

自己批判をなし神の前にすっかり自分をさらけ出してみると、完全に自己の無力と罪を知り絶対の絶望感に陥り死の苦しみを味わうに至るであろう。されど、真の信仰、救いの体験はかゝる状態に達したる時、打ち砕かれた魂に始めて与えられるのである。

○パウロの救とはある一時の現象がちよつと起つたのではなく絶対を生れかわつたこと、根本的に新生したることである。パウロは自分の力によつて神の前に立つことはできなかつた。彼は行い、割礼によらず、たゞ十字架上のイエス・キリストを仰ぎみその贖によつて罪を許され根本的に新しく生れかわつたのである。

○「神を見し者は死ぬ。」これを唱えたイスラエル民族は実に偉大なる民族である。「罪は如何にして赦さるか」そのいけにえ、祭事に就いてはレビ記に詳しい。(幕屋については出エジプト記三十五章以下をみよ。)レビ記の示す神と人間との関係はキリストの十字架によつて完全に成就されたのである。

○ヘブル書九章十章を見よ。イエス・キリストの福音は律法の書に規定された祭事、祭司制度の完成である。イエス自身が永遠の大祭司であり、完全な犠牲である。その十字架上の血によつて永遠に、完全に全人類の罪は許され潔められた。イエスを通して凡ての人は憚ることなく神の至聖所に入つて神と面接し交る事ができる。旧約の大祭司が一年に一回しか許されなかつた神との対面が、我らキリスト者にとつてはイエスを通して何時でも常に行わ

れ得る。ここに万人すべて祭司にして救いには祭司牧師の必要なきことを知る。無教会主義の唱えることもここに存する。

○コリント後書五章一四〜二一節を見よ。新生の体験を我らが持つことが出来る時、我らはパウロの信仰を知ることができる。己の利益を全部すて聖顔を仰ぎ神と共に歩み、その命に従う。困難も迫害も皆神の栄光のため・・・これが新生である。

○ピリピ書一章二一節を見よ。キリストとの完全な一致。これが新しき生命である。

○エペソ書二章三〜六節を見よ。神の救い、神による新生。キリストと共に甦る。

○ヨハネ伝三章三節を見よ。新生せざる人、神の国を見ること能わず。

以下ガラテヤ書一章一一節以下を説明する。(読みながら略解する。)

○一一節 わが伝える福音は人の伝統、権威制度等と全く無関係。

○一二節 黙示 (ἀποκάλυψις) は啓示と訳す方がよい。これまでヴェールに覆われしものを顕すこと。パウロはイエスの直弟子でもなく又十二使徒たちより任命された者でもない。そのためパウロのいうことは偽福音であると主張して止まないユダヤ人に対抗しパウロは強く本節の如くに述べたのである。

○一三、一四節 わが福音がイエスの啓示によることの證明。

○一五節 「胎を出でしより」は「生れる以前より」「胎の中にあるときより」の意。預定。

○一五、一六節 聖訓。聖召。啓示。神よりの派遣。人間のなも
の一切存在せず。眞の伝道者。

○一七節 アラビヤに出で行きしことは使徒行伝（九章参照）に
なし。然しパウロはすべての人間との關係をたち砂漠にて沈思、
祈りを捧げたのであろう。

○一八、二四節。この一八節以下は使徒行伝九章二六節以下と対
照させつゝ研究せよ。我々はパウロが他の使徒、教団と關係がな
かつたことを知るであらう。そしてパウロの使徒職と福音が人間
から如何に独立したものであるかの確證を与えられるであらう。

○二章二節。外面的には使徒行伝一五の二によればアンテオケの
教会より派遣されたのであるが内面的には全く神の啓示に由つた
のであつた。教会の決議が彼を動かしたのではない。「私かに」
は、秘密の意でなく「個人的に」との意。パウロの異邦人の中に
宣べる信仰のみによつて義とせられる福音は割礼の問題と關聯し
て多くの難問題を起して居るので使徒達との合議のみでは充分了
解し難い事を考へ彼ら各々に個人的に話しをする事に由つて十分
了解せしめた。彼らの誤解によりパウロの是迄の伝道が宜しくな
る事を心配したからである。

○三節。割礼が異邦人の救の必要条件に非ざることも承認され
た。

○四、六節。偽兄弟（律法主義者）は割礼を受けずば救われずと
唱へパウロを非難した。パウロにとっては割礼を施すことそのこ
とは別に差し支へはないが、もし彼らの術策に落なば律法を守る
ことが救の条件たることを認める様に思はれると、キリストの福
音の自由を放棄することになり、恐るべき結果を来らす。そのた
めパウロは福音の真理のため頑として動かなかつた。パウロはイ
エスの直弟子、使徒などという外形的なことには何等の関心がな
かつたが、彼らはパウロの宣べる福音に何も加えずそのまゝ承認
した。パウロの絶対独立。

○七節。ペテロとパウロの職分、分業。各人には神より委ねられ
た使命、職務がある。我々はそれを完うせねばならぬ。權威など
を以て他に圧制、干渉を加えるべきでない。

○八、一〇節。各人が神に在りて独立し愛によりて相交る。ここ
に眞の一致がある。

○一一、一四節。ペテロの偽善とパウロの叱責。ペテロは周囲の
事情に支配されて偽善をなした。然しパウロは決して人によらず
神に従つて歩んだ。ペテロが異邦人と食事せず彼らと交ることを
避けたのは、ユダヤ的基督の律法主義への遠慮であつた。之を更
に引き伸ばせば異邦人がユダヤ人の如く割礼を受けずば救われず

との誤信を生ずるに至らん。正に福音の根本に関する重大問題。パウロの激しき叱責。

○一五〇二一節。パウロの福音について述べている。律法は我らを絶望に陥らしむ外なし。救いはイエス・キリストを全き信頼を以て信ずる信仰のみにある。律法によつて我らの罪は審判れ、我らは十字架につけられて殺された。然しそれはキリストが十字架につけられ死に給えることである。我らはたゞ信仰によつてキリストと一体となり彼と共に十字架に死んだのである。そして現在、生きているということは神の子イエスを信ずる信仰によつて新しき生命を与えられているが故である。救いは全く神の御業神の恩恵による。この恩恵のみで義とせられず更に律法を必要とせばイエスの死は無駄となる。そして我らは今なお律法を行えず罪人となり亡びに至るであろう。義とせらるるに信仰以外何もものも附加するの要なし。信仰は絶対なり。

○我々も自己に全く絶望するに至れば神からパウロの如き信仰を与えられるであろう。福音は天からの放送である。我らがこの放送にダイアルを合わせんとするには、自己に死し打ち砕かれた魂とならねばならぬ。そしてその時、初めて我らは十字架の福音が神の智慧、神の恩恵たることを知るであろう。

午前一〇時三〇分より約一時間、西山研究所長河内氏より研修所の創立事情、変遷、事業内容、将来の計画及び西山荘等附近の史

蹟について説明を受く。終つて松本文助氏の謝辞と「水戸学精神とキリスト教」についての所感発表。

◎黒崎先生第三講。午後二時〜三時三〇分。

(司会 菊池喜雄)

讚美歌五二八、コロサイ書二の五〜六

讚美歌二六一

○イエス・キリストの福音によつて旧約の律法が成就された、律法は発展解消すべきだといふパウロの信仰は当時のユダヤ人にとつて理解することができなかった。

○皇室中心主義、武士道的精神は神中心の信仰を培うのに旧約的意義を持つ。日本人は神に凡てを献げ得る国民となるであろう。

この点に日本のキリスト教に対する使命がある。

○パウロはキリストに対する深い信仰と福音伝道の熱心さにより種々のたとえを以て福音を説明した。

○ガラテヤ書三章以下を説明する。(以下読みながら略解する。)

パウロは再びガラテヤ人に向つてその非難を向ける。「愚なる哉、ガラテヤ人よ」これは非常な憤りである。然しこれは真に愛せしが故に虚偽に対して発せるキリストにおける愛の憤りである。パウロは厳格であると同時に寛容であつた。

○寛容と非寛容。難しい問題である。今日の数多い分派は極く小さい相違にも、直ちに自分のみを正なるものとして、その点を特に強調し他を排斥することが信仰の純潔を守るものだという考えから生ずるに至ったものである。無教会と称する中にもこの点が可成り強いものがあり、その結果無教会自身が最も嫌う一つの宗派となりつゝあるのをみる。我らは信仰の中核とそうでない第二義的のものとの区別を知るべきである。

○内村鑑三は無教会者であるが洗礼を受けたし他にも洗礼を施したことがある。また札幌独立教会を助けたり一部の教会牧師とも交際をもった。然しこれは決して矛盾ではない。内村鑑三の信仰は直観的であり、バルトの如き論理的信仰とは異なる。先生の信仰はイエスの十字架の死による罪の贖をその本質としこれを絶対保持したが他は全く自由であつて無教会主義を律法化しようとはしなかつた。無教会主義でなければ救われないというのは誤りである。

○ロマ書一四章によつて我々はパウロの信仰の自由を知る。彼は信者の性向、理解の程度等の差別は寛容を以て対し、それ自身どうでも良いことには固執しなかつた。然しキリストが無視されることに対しては絶対にも一歩も譲歩しなかつた。

○二節。新しき生命に入り得たのは、律法を熱心に行つたが故か！イエス・キリストの十字架の福音をきゝ単純に信じたるが故か！救は信仰による。律法によらず。

○三節。信仰により旧き己に死し御霊を受けて新生に入る。肉の心は律法を喜ぶ。

○四節。信仰のみによつて義とせられるという信仰により今までユダヤ人から迫害を受けた。それに耐えしことは無意味か！

○六節。ロマ書四章にも引用さる創世記一五章六節の聖句。永遠の真理。「義とせられる」 justification それでよろしいと神に認められること。

○七、九節。アブラハムの絶対的信頼を神は喜ばれた。ユダヤ人は肉によれるアブラハムの子孫。血統、律法によらず信仰によるものこそ真のアブラハムの子孫。異邦人も信仰によつて義とされることの預知。肉に非ず信仰のアブラハムに祝福。信仰は祝福の源。

○一〇節。申命記二七章二六節にある聖句。パウロの苦しき実験。凡ての律法を常に完全に行うは何人にも不可能。律法は詛の基。

○一〇節、一四節。信仰により生くる者は義人である。信仰は信ずることが主であり、律法は行うことが主である。律法を完全に行わない者は詛わるが、罪なきキリストは十字架上に死に給ひ、詛いから我らを贖い出し給う。信仰のみにて義とせらるに至り八節の約束は実現しその祝福は万民に及ぶ。

○一五、二二節。神はアブラハムとその裔に神の国の嗣業を継ぐべきいろいろの約束を与え給うた。(創世記一二の七、一三の一

五、一七の七、二二の一七、二四の七等）神の約束は永遠であり、嗣業は律法によつて受けることができない。律法は人間の罪の本質を明らかにし信仰によりて約束を与えらるゝことの意義を知らしむ。律法はイエスの来り給うまでしか有効でなく、約束に反対したりそれを無効にせしめるものではない。人間を生かすべき律法なし。すべての者を罪の下に閉ぢこめおくは約束が律法の行為によつて与えられず、イエス・キリストに対する信仰によつて信ずる者に与えられたため。

○二三〜二九節。律法は牢の如きもの、また守役、家庭教師 παιδαγωγός のようなものである。それは我らの肉の欲望を抑制し厳格な訓練により己の力の程度を知らしむ。然し我らは律法に従つては絶望と死にして到底義とされぬことを知り、キリストに行きその贖を信じて義とせらるゝに至るのである。信仰によつて新生しキリストと一体をなしたる者はすべて律法に束縛されず独立自由である。そして神の子とされる。またアブラハムの子孫として約束された嗣業をつぐ者とされる。

○神が我ら罪人を救つて神の世嗣となし給う絶大な救いの御計画は一朝一夕に起つたのではない。罪人を救うべく独子イエスを賜ひ御許に立ち帰らせんとしたる事は世の基の置かれぬ以前から、あらかじめ定められてあつたのである。この救いの深く且つ遠いことを明らかにするのが旧約聖書であり、我らは旧約の無用

無意味でないことを知る。然しイエス・キリストによつて救われた者は旧約にかぎりついてはならぬ。

○四章一〜一節。律法は後見人また家令に過ぎない。小学は(1)イロハ、(2)元素、(3)初歩の意味をもつ。ここは(3)の意で道徳的律法や特定の日、月、季節、年を守ること。飲食に対する制限その他の禁止規定の如きは初歩の教え。我ら今やキリストに贖われて神を「アバ、父」(アバも父の意)と呼ぶ神の子、世嗣とされし者、再び小学の僕となるな。信仰によつて義とされしものは律法に束縛されず。

○一二〜二〇節。パウロのガラテヤ人に対する愛の苦しみ。パウロは男らしい戦闘的人であるがその反面非常に女性的な思いやりのある人であつた。これは偉大なる人の特徴である。愛によりユダヤ人たる特権と習慣を棄て異邦人たるガラテヤ人の如くになつたパウロは彼らに自分の如く信仰により律法から自由になつてほしいと願つた。先にパウロはガラテヤに於てマラリヤの如き風土病にかかつた。(北部ガラテヤ説の根拠)これは神の詛いとされていたがガラテヤ人は彼を卑しめ嘲けらず反つてイエス・キリストの如くパウロを厚遇した。また彼らはパウロに大切な目まで与えんとするまで深い愛をもち喜んでパウロから真の福音を学んだ。パウロ自身また愛をもつて熱心に真の福音を伝えたのに今は全く彼らが反パウロ的になつてしまつたのは何たることか！偽教師たちはキリストよりも、先ず己を愛せんことを求め偽の教

えを伝う。ガラテヤ人の心の中に完全にキリストの形を造り出さなければ救いは全うされない。それまでパウロは産みの苦しみをなそう。弱きガラテヤ人に対するパウロの深き愛が満ち溢れているのをみよ！コリント後書にも本節の如き教会者に対するパウロの切々恋々たる愛情が示されている。

○二一〜三一節。パウロはガラテヤ人が旧約の本来の意味を知らずして旧約に捉われているのは誤りであるとし、アブラハムの二子をたとえにして律法と約束との区別を示している。

婢 女 ハガル―今のエルサレム―律法―旧約

自主の女 サラー上のエルサレム―恩恵―新約

ハガルの子―イシマエル―奴隷の子―律法主義者

サラの子―イサク―約束の子―キリスト者

二七節はイザヤ書五四章一節を見よ。律法主義者は福音の上にも立つ者を迫害するが嗣業をつぐことはできない。神の国より追い出さる。自由なる新約の子、即ち信仰のみによつて義とせられ救いに与つた者のみが世嗣となる。

○儒教、佛教も我々をイエス・キリストに導くための律法の一つであるが、約束を伴つた律法はユダヤ教であり、旧約聖書である。旧約聖書は神の人類に対する救いの計画を教える。我々は神を信ずる。而して信ずる神とその恩恵たる救いの計画及び経過をよりよく知るために旧約聖書の研究を熱心に行わなければなら

ぬ。旧約はイエス・キリストが生れ給うまでの準備である。キリストによる救の預言である。

午後三時三〇分より、約二時間半、先生と共に西山荘等附近の史蹟見学をなす。

夕食後、午後八時より約一時間半、先生に対する質問の会を持つ。(司会 佐々木良二) 讚美歌四〇三 ヨハネ伝一四の一〜一六 讚美歌三四一、紙面の都合上先生御教示の一部を左に記す。

○信仰は生れかわりである。イエスにより頼み、罪の奴隷たることから解放され新生命に生きることである。然し新生せるものは肉そのものを全然所有せざる状態にあるのではない。新しき生命は依然として旧い不完全な肉体の中に存するのである。この結果神に従わんとする心と肉に従わんとする心とが共に我がうちに存して激烈なる戦いにあるのがクリスチャンの実験であり生涯である。上を仰がず神から離れ肉に負けたる時、耐えがき深刻な苦悩に陥る。されど我らに救主イエス・キリストあり、彼によりすがりて我らは救われる。神の許に立ち帰り得る。この恩恵と苦悩とが繰返えし、繰返えし連続するのがクリスチャンの生涯である。我がうちを見るなかれ。上を仰ぎ直に神の御許に帰れ。ロマ書七章のパウロの限りなき苦闘の体験を熱心に学べ。

○十字架によつて救われるのだということを知る知識が信仰そのものではない。神に信賴する人格的な關係が信仰である。教義の承認と信仰の区別を知れ。

○本当の信仰を得るために聖書研究が先決問題かというような質問があるが私は必ずしも先決問題だとは言えないと思う。キリストの福音を本当に正しく宣傳伝える人があればそれによつてよいのである。ただ人間が伝える場合には不完全さや誤謬が之に伴い福音の本質に矛盾するようなことがあるから、正しい信仰を行うためにはよく聖書を研究するの必要がある。

○聖書の真理の發展的理解がなければいけない。それをよく知らない人やグループの聖書勉強は危険である。

○英、米、独の一字などでは小学校で聖書を教授するが先生に信仰あるとはいえないようである。勿論、キリスト教を教えることは結構であり、今日に於てキリスト教々育は希望さるべきである。然し伝道は信仰をもつてゐる人の人格からくる。信仰の問題は信仰から語らねばならぬ。信仰を持たざる人が単に聖句を教へても力なく、偽善を教へることになる。単なる知識としてのキリスト教は生命のないものであり、かかるキリスト教々育は福音や信仰という言葉の慢性化、習慣化を来らし恐るべき結果を招来することになるであろう。

○最近の学校は人間を作らない。私は信仰ある人間を育成したい。然しこれが育成は単に教へて得られるわけではない。真に信

仰に生きる人の人格から来る。私は無教会精神の教育として寄宿舎を中心とする塾を建て、眞の信仰ある指導者が日夜、青年と接し眞の人間教育に努力していくというプランを持っている。諸君の御後援を願いたい。

○平和論、非戦論の問題にキリスト者が消極的に見えるという問題については私は次のように考へている。聖書を見ると神はモーセ、ダビデの戦勝を別に非難もしていない。けれども神は血に汚れたモーセをピスガの山に入れなかつたし、またダビデが神の宮を建てんとした時、之を阻出された。イエスも戦争については否定もしていない。反つて軍人を賞められたことはある。併しそれだから聖書は戦争を肯定して居ると云う事は大きい誤であると思う。従つて我々が戦争に対し消極的な態度を取つてもよいと云う理由は全くない。前述の如く我々は聖書の真理の歴史的發展を理解せねばならぬのだ。モーセなどの古い時代はそれこそ全くの理由なしに強国は弱国に侵入してきたのであり、又部落相互の理解が不可能であつたので敵の攻撃に対しては止むを得ず防ぎ戦わなければならなかつたのだ。然し今は違ふ。歴史は進み人類間の理解が不可能になつた。そして科学は發展してどんな理由あろうと戦いを起せば全人類は完全に滅亡してしまう恐ろしい原子力時代なのだ。平和は真理であり、我々は絶対に戦つてはならぬ。今こそ軍備を撤廃すべきときなのだ。米國やソ連が頑固に、盲目的に自己主張を曲げない態度をとるならばやがて恐ろしき神の

審判が下される。カトリック以来長いキリスト教の習慣は国家の問題、国際関係の問題を信仰問題の外に分離して全く問題外に置いた。戦争は神の御心に対する明白な違反である。教会に行っている者は教会の生活のみをキリスト教生活と心得、毎日の生活は信仰と関係を持たない。然し無教会者は毎日の生活、全生活に於てキリストの教えに従わんとする。而してキリストの教えは足が地についている。時代的背景をもっている。キリスト者は社会主義、共産主義によつて世は救われるとは考えていないが現世の人類の諸悪をそのまゝにしておくことの出来ない程、世を愛する。キリスト者は如何に憎まれ、嫌われても世の悪と闘い之を責めなければならぬ。どうして平和論、非戦論に消極たり得よう。キリストが云われなかつたら我らは非戦論を唱えない。唱えていけないという事はあり得ない。聖書の真理の歴史的発展を理解せよ。

○教会と無教会との関係は愛のみによつては解決できない。教会の現実の在り方に関する批判はブルンナーの「教会の誤謬」を見てほしい。今日の教会は真実と愛を欠き真のエクレシヤを葬ろうとしている。

○再臨は信仰によつて新しい生命を得ればおのずから到達すべき信仰である。聖書は明かに来世について教えているだけでなく、我らの希望の完全実現は来世にかゝっていることを主張する。来

世はキリストの再臨によつて始まり、来世において栄光を受くべき者はキリストの血によつて贖われたものである。

○キリスト以前の人々の救いについては、聖書は何も述べていない。聖書は理論を全面的に解決するための書ではない。我々の靈に関する問題を示し、神が我々自身に直接、与えられたものである。これに対し我々は信ずるか信じないかの何れかしかないのである。

○コリント前書一四章三四節「女は教会にて黙すべし」はパウロがコリントの婦人の饒舌を戒めることを第一目的としたもので、他の諸教会のやつている習慣に束縛される必要はないが、殊更に破る必要もないと考えて云つたのであろう。それを単に聖書に書いてあるから今日も実行せよというのは誤っている。洗礼についても同様のことが言える。

○ガラテヤ書四章一九節「キリストの形成るまでは」の聖句は表面だけキリストらしくなるのでなく、信仰によつてあらゆる意味に於てキリストと一心同体となりキリストと同じ神の子とされるまではの意である。

第三日 七月十一日(月曜日)

早天祈祷会・・・午前六時～六時半

(司会 福田賢太郎)

讚美歌五四六、ロマ書八の一二〜三五、八の三一〜三九、

讚美歌五二九

◎黒崎先生 第四講・・・午前八時〜一〇時

(司会 小沢ひで)

讚美歌三七七、詩篇八四、讚美歌五一七

○「信仰と行為」の關係が如何にあるかということは誠に重要な問題である。「信仰と行為」この二つは全く一つのものであつて區別されるべきものではない。即ち信仰は信仰、行為は行為と二つを並列させたり、一方のみに着目し他をかえりみないという事は非常に大きな誤りである。この二つの相違が問題にあるうちは本當の信仰、本當の行為とは言えない。神は我らの行いの完全を要求される。しかしこの完全に近づく力は我らが神により頼む信仰によつて神の恩恵からのみ受けることができるのである。自己の力で行わんとしても信仰なしに行為を完全ならしめることは我らには絶対不可能である。また眞の信仰により神の恩恵を受け新生したるものは絶対に神に服従し悪と戦ひ抜く。行為に現れない信仰は生ける眞の信仰ではない。佛教は行為を重んじ道徳律を克己修養によつて達成せんとしている。而して修養による行為は偽善になり易い。洗礼を受ける各種の教会行事に参加してもまた豊富な聖書知識を持つていても形式的信仰からの行為は律法化し偽善となる。道徳生活プラス教会生活イコール、クリスチャン生活と考へているクリスチャン。信仰によつて自ずと溢れ出る愛に非

ずして愛にならなければならぬという意識の下に行動するクリスチャン。彼らの行為は不自然であり偽善である。

○パウロは信仰第一、信仰絶対主義であつた。而してそれは己れ全部を神に委ね、御霊のまゝに導かれるということである。そこには信仰、行為という対立問題はない。すべての行為は一つの生命から流れ出る。信仰第一、その信仰が生きた眞の信仰であるならば愛ある行為は意識せずとも自然に生れ、溢れて流れ出だすであらう。

○ガラテヤ書五章一節「キリストにある自由を確立せよ。キリストは己が生命を与えて我らを律法の束縛とその詛とより解放し自主独立の身として下さつた。キリストの死を必要とした恩恵の極なるこの自由確守せよ。」

○二―二節。割礼の無用なるを教える。(これらの節はピリピ書三章を参照せよ。)割礼を受けこれによりて義とせられんとするはキリストを全く無用のものとなすことである。キリストから離れ、恩恵からおちることである。割礼を受くる者は律法により義とされんと欲する者であるから律法全部を守れ。然し何人もできないぞ。信仰は何物をもこれに附加することを要しない。それを不完全なり、割礼を要すと汝らをたぶらかす偽教師はたとい使徒であろうと誰であろうと審判を受けるぞ。いやそんな連中はいつそのこと割礼の際皮だけでなく全部切りとつてしまえ。一二

節「不具にする」 ἀνοκότης 「切斷する」という意味のパウロの激しい言葉。これを協会訳は上品にし弱めている。パウロは野人なのだ。

○教会はキリストと直結することによって真の教会たり得る。キリストとのつながりを教えず教会とのつながりだけを教え、キリストにある自由を束縛する教会は誤りである。信仰のみによって義とせらるゝことを知らず、また真にキリストと直結することの意味を教えることが出来ない牧師、割礼、洗礼といったような形式を附加して救いを得させようとする牧師はガラテヤの偽教師と同じである。

○五節。我らは御霊に導かれ、律法の行為によらず信仰によりて救われ、潔められすべてに完全なる義を与えられるに至るであろうことを待望んでいる。

○六節。イエス・キリストに在る者にとつては割礼を受くる如き形式的のことは何の役にも立たない。然し反対に割礼を受けないということも誇るべき理由にならない。たゞ必要なものは信仰であり而も愛により働く活ける信仰である。真の信仰はやがて神の愛を以て人を愛する愛となる。我らは無教会主義によって救われるのではないことを知る。

○一三〜一五節。愛と自由について、神により我らキリスト者は律法からの束縛を脱し自由を与えられた。但しこの自由は霊の自

由であつて肉の自由ではない。常に聖霊の導きに従つておればよいのであるが新生せる命は依然として旧き肉の中にあるので往々にしてこの自由は肉の自由と混同濫用され、それに引きずられることがある。信仰によるこの自由の唯一の制限は愛である。愛によつて支配されない自由は肉の自由となる。律法は沢山あるが「おのれの如くなんぢの隣人を愛すべし」によつて律法全体が全うされる。此の愛をもつて凡ての人の僕となり仕えるならば信仰によれる自由の立場に於て律法の全体が全うせられ肉の自由に陥る危険は妨げるであろう。パウロはガラテヤの教会が偽教師の侵入により肉の思いが出、互に分離、相争う状態が起りつゝあつたのを見てとり愛をもつて互に仕うべきことを教えたのである。

○一六〜二六節。肉の行為と御霊の果。霊は精神、肉は身体と解するものが普通多いがこれはインド、ギリシヤ哲学の考へ方であつて肉体と精神は分離して考えられ、前者は罪のもの、後者は神的なものと見る。然しキリスト教の教えるところはこれと異なる。肉は生来の人間の精神と肉体 soul、mind、heart and body であり、霊は新生せる人に宿れる神の霊である。（コリント前書二章一四、一五節参照）生来の人間は肉体も精神も悪である。二四節の如く肉はその作用たる精と欲と共に十字架につける外、途がない。霊は肉の進化浄化したるものでなく天よりの新しい生命である。霊の結ぶ果と肉の行為とを対照せよ。クリスチャンは新しい生命を旧い肉の中に宿したものであり、この二者が心の中で

互に闘いつゝあるのがクリスチャンの状態である。然し御霊によりて生くるがクリスチャンである。クリスチャンは肉の欲を遂げず御霊の導きに従つて行動していかねばならない。

○六章一〇節。愛の交わり、愛によつて互に助け合ねばならぬならぬことを教えている。無教会には愛がないという批判をする人があるが何故だかその理由が判らない。無教会の人たちは無愛想であり正邪をはつきりさせる。虚偽の愛はないが眞の愛は有る。

○一〇五節。肉に従わず御霊に従つて歩む人々は、弱さのために罪に捕えられている人があつたならば御霊の果なる柔和を以て正してやるべきである。またその罪のために受くべき苦痛、重荷をその人と共にしなければならぬ。他人の罪をみて自分は信仰があるから大丈夫だと誇り、他を審く程、危険なものはない。大きな罪である。これによつて神から離れ隙間ができる。必ずサタンに乗ぜられるであらう。人々は自分自身の行為をよく験してみれば自分に誇るべき何物もないことを知るであらう。人は皆、自己の罪深さより生ずる苦痛、重荷を負わなければならぬのだ。我々は神から離れたら力はない。

○六〇一〇節。弟子は霊の財を与えられる故、教師と物質的幸福を共にすべきである。善をなさないで居りながら少しも悪をなしていないと自ら欺く者は神の報いを受く。自分の肉の満足のために準備をする者は永遠の滅亡に入る。御霊の満足するよう準備し

人のために善をなすことに努力するものは永遠の生命を刈り取ることが出来る。

○一一一七節。再び割礼無用論を述べる。ガラテヤ書はパウロ自身の筆になる。御霊に従はずして外形上人に良い顔をしたい。好感を与えたいと思うものは迫害を恐れ異邦人に割礼を強制する。割礼を受けることを主義としていながら偽教師たちは自ら律法を守らず種々の虚偽を行う。彼らは肉に割礼を受けしめ、律法的にユダヤ人と同じにした事を誇らんがためである。キリストの十字架を仰ぎみるものはキリストと共に十字架上に死んでしまつたものである。そして世の富も名誉もその他あらゆる誘惑は皆十字架上に死んでしまひ彼は世より見て全く一箇の死人であり世にあるものと同じである。肉が世にして新生したる者にとつては世人の目によさそうに見えるものなど全く問題外である。神の前に義とせられるためには信仰により聖霊を受け新たな被造物とせられ、全く新生することが必要であつてそれ以外のことは絶対に不要である。割礼の有無など問題にする必要はない。割礼は受けても誇りとならなければ受けなくとも誇りとはならないのだ。したいものはすべし、したくないものはしなくても可である。我らはただ如何にすることが最も神に仕えることになるかを考えればよいのである。パウロはイエスの印を身にもっているイエスの使徒である。パウロはかゝる問題で今後、われを煩わしてくれるなど強く要望した。イエスの印とはパウロが伝道の際、多くの迫

害によりうけた傷跡をさしている。パウロは全身にこれだけ傷をうけているのにこれ以上割礼という傷の問題で煩わしてくれなと皮肉った訳だ。

○ガラテヤ書自身の示す割礼という具体的な問題は現在の我々と直接には関係のない問題であるかも知れない。然し我々はこの中からパウロの精神、信仰の本質を学び取らなければいけない。またパウロの雄々しい生涯を知るべきである。パウロはキリストと共に徹底的に生き抜いた人である。律法を超え信仰から信仰へと信仰一本槍に突き進んだ人である。ガラテヤ書の精神を汲みとれ。ガラテヤ書全文によつて聖書全文が分るといつても過言ではないのだ。そしてガラテヤ書の精神に生きるものこそクリスチャンなのである。

感想発表会・・・午前一〇時一〇分～一時三〇分

(司会 半田梅雄)

讚美歌五五〇 コリント後書四の七～一八

讚美歌五五一

講習生全員の感想発表があつた。種々の発表が行われたが全員に共通しているとみられる感想は、この三日間にわたる教会、無教会を超えた主に在る交りを心から喜ぶということ、先生を通してパウロの烈々たる信仰のみの信仰を学び得て感謝するというこ

と、そして先生の御人格に深い感銘を受けたということであつた。

最後に先生から、この講習会が、教会、無教会を超えた平和な集会であり、小さいながら「一つの教会」の実現であつたことを喜ぶと御話があつた。

晝食後閉会式。主催者代表松本文助氏の挨拶、先生の祈祷及び讚美歌四四一番を以て午後一時過ぎ、恩恵と感謝そして希望溢るゝうちに水戸無教会グループ主催昭和三十年度夏期聖書講習会はその幕を閉じたのである。

